

4. 重い病気の子どもたちとその家族を支える社会活動

A. そらぶちキッズキャンプ(北海道滝川市)

佐々木 健一郎

(公益財団法人 そらぶちキッズキャンプ)

開設までの経緯

そらぶちキッズキャンプの計画は、国内で活動する2つの流れが、ほぼ同時に医療ケア付キャンプ場を造ろうと動き出したことに端を発している。1つは、医療者たちの取り組みである。当財団代表理事 細谷亮太医師（聖路加国際病院・顧問）が仲間の医師や看護師らとともに、重い病気の子どもたちにとって病院の外に出てキャンプを行うことが、闘病生活の大きなエネルギーになると考え、活動を始めた。

もう1つは、公園造りの専門家たちの取り組みであった。当財団執行理事 松本守氏（元・国土交通省審議官）は仲間とともに「バリアフリーの公園という考え方を超えて、病気の子どもの幸せをサポートすることができないか」と考え、豊かな自然環境がある北海道滝川市やその関係者とともに、その実現に向けて動き出した。

2004年、思いを同じくする2つの取り組みが重なり、日本で初めて、重い病気の子どものための医療ケア付キャンプ場造りが始まった。約10年をかけて既存公共施設を使ったテストキャンプや、広報PR・資金調達活動を行い、2012年念願の専用施設群を完成させ、2014年には本格開園にたどりついた。

使命・目的

そらぶちキッズキャンプのミッション（使命・目的）は、重い病気の子どもたちとその家族を、医療ケア付キャンプ場に無料で招待し、北海道の豊かな自然環境の中で、病気や障害のことを気にせず、思いきり遊んでもらいたいというものであ

る（図1, 2）。キャンプ場で過ごす非日常の時間が、闘病中の子どもたちや家族の「休息」になり、「明日を生きるエネルギー」になることを目指している。

キャンプの種類と運営体制

現在、4つの種類のキャンプを実施していて、全国から多くの子どもたちや家族が参加している。

「キッズキャンプ」は、小学生から高校生の病児のみが参加し、「ファミリーキャンプ」は、年齢に関係なく、病児、きょうだい、親が家族単位で参加する。これらはキャンプごとに同じ病種を設定し招待をしていて、専門の医療体制（専門の医師、看護師などの参画）が整った段階で、病種を増やしている。現在は、小児がんと小児外科系疾患を対象としているが、今後は心臓疾患も増える予定である。また「レスパイトキャンプ」と呼んでいる、主治医の同行が必要な病状の子ども（小児がんのターミナル期や人工呼吸器をつけた子どもなど）を対象とするファミリーキャンプも行っている。このほか家族会などを団体として受け入れる「グループキャンプ」もある。これら4種類のキャンプは3泊4日で行われ、現在はあわせて年間10回であるが、今後、年間15～20回実施する計画である。

そらぶちキッズキャンプが実施するキャンプは医療的配慮が必要となるため、参加者募集、キャンプ場への移動、生活面、レクリエーション面などの一連のアレンジを、キャンプ場に常駐する専門スタッフ（看護師など）がすべて行っている。キャンプ中の医療支援としては、専門の医師、看



図1 馬車体験



図2 車いすで行けるツリーハウス

護師が常駐し、キャンプでも日常の医療ケアが継続できるようにサポートしている。「ほけんしつ」と呼んでいる専用の建物もあり、集団から離れての休息や、特別な処置が必要になった場合にも使う（図3）。また滝川市立病院と連携し、緊急時対応ができる体制を整えている。

このような施設は国内にはなく、すべて寄付やボランティアの力で建設・運営している。今後、年間キャンプ数を増やしていく計画であるが、積極的な広報PR活動を行い、さらに支援の輪を広げていくことが必要となっている。



図3 ほけんしつの様子

キャンプの効果と今後の展開

キャンプという自然のなかでの集団生活では、人との触れ合い、自然との触れ合いの機会が増えることなどにより、さまざまな効果を生み出す。以下に参加者からの感想を紹介する。

- A氏 「1人じゃないんだ、仲間がいるんだと、初めて感じる事ができた」
- B氏 「キャンプ参加は自信になりました。
子どもの可能性を信じ、これからのいろんなことにチャレンジしていこうと思う」
- C氏 「病児、きょうだい、両親、一緒に楽しめたので、家族同士のいろいろな表情を発見できた。あらためて“家族一緒”が一番楽しいと感じた」
- D氏 「誰にもこの苦しさは分からないと思っ

てた。でも、こんなに支えてくれている人がいるんだ」

おわりに

そらぶちキッズキャンプでは、キャンプの効果をより深いものにするため、キャンプの参加前、参加後も大切にしたいと考えている。「こんなキャンプがあるんだ。行ってみたいな」と思ってもらうこと、「キャンプではあんなチャレンジができた」と思い出してもらうこと、日常生活で「明日へのエネルギー」が生まれるために、キャンプ前後の参加者とのやりとりも大切に、このキャンプが重い病気の子どもや家族にとって、目標や支え、居場所、こころのふるさとになることを目指していく。